

社会主义中国の宗教政策

—抄訳『中国社会主义時期の宗教問題』その五一—

永井政之

はじめに

前号に引き続い『中国社会主义時期の宗教問題』の第四章「宗教が長期に存在する理由」の訳を掲げる。資本主義社会から共産主義社会へと進む過程としての社会主义社会になぜかくも「宗教」が根強く存在するのか。その理由を唯物主義の視点から分析した本章は、宗教と人間の関係を唯物主義ではどう見ていいかということを示すものもある。とくに本書が「文化大革命」への反省をふまえて編まれていることを考慮するとき、読みようによつては、中国社会における宗教信仰の実体を示唆するものとして興味深いものがある。

それにも、周知のように、近年の中国の情勢は、鄧小平の指導する近代化路線が、善くも悪くも中国の全体をおおついていることは否めず、当面の課題に即して言うなら、本書がその底流にもつ政治と宗教の間の緊張関係もずいぶんと薄

れているようにも見受けられる。実際、仏教の寺院の復興、道教廟の復興、出家者の増加など、教年前では予想もつかなかつた事実は枚挙に暇ない。拜金主義の様相もなくはない。もちろんそれは一人宗教界のみのことではないが、いずれにしてもゆるんだ政治の箍がふたたび掛けられるのか、それともこのまま近代化の路線を突き進むのか、注意を要しよう。ちなみに九三年一二月下旬のマスコミの報道は、香港のランタオ島に東洋では最大の露座の大仏が建設され、その開眼の法要に各国から来賓が出席したが、その中には、かつて中国の社会主义化を拒否して大陸から亡命した僧侶たちから非難が集中した、中国佛教協会の趙ト初会長も居たと伝えている。お互いがどのような顔をして法要に臨んだのかは知るよしもないが、香港と中国の佛教界の友好促進のためという大義名分と、そしてそれが数年後の香港返還を睨んだ行動であることは言うまでもなく、ここでも近代化の中で中国における政

治と宗教とが密接な関係にあることが明かである。

いずれにしても、本橋をなすにあたつて言葉の問題から参

考書にいたるまで、さまざまに御教示賜わった内山書店三浦勝利氏に記して謝意を表したい。

△本文△

第四章 宗教が長期に存在する理由

人類の歴史の長い流れのなかで、宗教はすでに原始社会、奴隸社会、封建社会、資本主義社会、さらに社会主義社会などに至る、異なつた社会形態を経て、今も世界各国、各民族のなかに存在している。

十八世紀、フランスの唯物主義哲学者の、ラミトリ、ハドラー、ホイエルバッハらはいずれも、宗教の根源は人民の愚昧と無知であり、「愚か者にペテン師が加わつた」結果であると考えた。レーニンはこれを浅薄で狭隘な文化主義の見方であるとした。なぜなら彼らは「神」の概念を虚構なるものと指摘したが、しかし彼らはこの虚構の概念に対して、形而上学と唯心的歴史観から出発して批判を行なうだけだった。また彼らは宗教の現実の基礎に触れなかつた。ホイエルバッハの限界は、彼が人の本質を抽象化しただけで、人の本質を「あらゆる社会関係の総和」と認識しなかつたことである（マルクス・エンゲルス選集一「マルクスからアルノト・ルーゲへ」）。

マルクスとエンゲルスは、弁証法的唯物主義と歴史的唯物主義の観点から、宗教の発生と発展の根源を分析し、宗教の根源は「天によつてではなく地によつて暮らしております」（マルクス・エンゲルス全集一七）と指摘した。宗教とそのほかのイデオロギーは共通性があり、いざも人々の社会的存在の反映である。宗教の特殊性は単にそれが社会的存在の歪曲性と、幻想性の反映であるということにある。マルクスとエンゲルスの論断は、我々に、宗教意識の発生の原因を理解するには宗教徒がおかれている客観的現実社会から、彼ら自身の主観的要素の方面までを探らなければならない、すなわち一定の歴史的条件のもとで社会のどのような物質的条件が人の脳のどのような要素を通つて働き、どのようにして人に宗教幻想を発生させるのかを検討すべきことを教えて いる。

我が国の社会主義社会では、搾取制度と搾取階級の消滅とともに、宗教が存在する階級的根源はすでに消滅した。しか

し、人々の意識の発展は総じて社会的存在よりは遅れるため、旧社会が残した古い思想、古い習慣はどうしても短期間では徹底的になくすことができないし、また、社会の生産力の極めて大きな向上、物質的財産の豊富さ、高度な社会主義の民主の確立、および教育、文化、科学、技術の高度な発展があつても、なお長い奮闘の過程が必要であり、厳しい天災人禍がもたらすさまざまの苦難によつて、短期間のうちに徹底的に脱却できないし、一定の範囲内に存在する階級闘争と複雑なる国際環境等々によつても、宗教は必然的に長期に存在するのである。我が国の現段階で人々が宗教を信仰する原因に対し、我々はマルクス主義の、あらゆることを実際から出発するという原則を遵守して、毛沢東が提唱する社会調査に照らし、かなり広範な調査を進めた。本章は宗教の伝統的影響、社会的原因、心理的因素の三つの方面から、宗教が我が国の社会主义の時代において存在する根拠について論述する。

第一節 宗教の伝統的影響

人類社会の発展の歴史は、絶ち切ることのできない一幅の絵巻である。イギオロギーはある程度は社会存在の反映であり、社会と経済の改变につれて変化するが、しかしながら独立性をもつてゐる。宗教は、一種の物質を基礎とするイデオロギーとは、比較的離れたものであり、宗教とほかのイデオロギーと比べるなら、変化は緩やかで、さらにはつきりした歴史継承性をもつてゐる。まさしくエンゲルスが言うように「宗教はいつたん形成されるとどうしてもある種の伝統的因素を包含するが、それはあらゆるイデオロギーの領域の伝統が、すべて一種の巨大な保守の力だからである」（マルクス・エンゲルス選集四）。わが国の社会主义の時代において、宗教の伝統的影響は、主に以下の各方面に表れる。

（一）宗教活動が集中している地区的伝統的影響

漢民族地区の各種の宗教はどれもとても長い歴史をもつており、その伝統的影響は、いくつかの地区の活動の中にとくに明らかである。

各宗教はその発展の過程においてさまざまな原因によつていくつかの地区に特長を形成した。このような地区の中には、宗教の聖跡が集中しており、多くの教徒が活動に参加するよう引き寄せ、宗教生活の中心となつてゐる。歴史的変遷の複雑な原因によつて、そのうちのあるものは遺跡となつてゐるが、しかしもある地区では今もなお比較的大規模な宗教活動が行

なわれている。

仏教・道教は、いざれもその歴史が作り上げた名山や勝地をもつてゐる。たとえば仏教の九華山、普陀山、五台山、峨眉山の四大名山には、いざれも沢山の聖跡と古寺古刹がある。『九華山志』の記載によれば、九華山には、晋代に仏教が伝わり、唐代になって盛んとなり、一千年以上にわたつて香火の絶えることがなかつた。調査者の見たところでは、一九八四年、地蔵菩薩の誕生日（農暦七月三〇日）の前の一週間、各地から来た多くの信者は、七、八十歳の老人も含めて、ある者は手に杖をもち、ある者は人に支えられて上り、ある者は一步ごとに礼拝しながら登山した。人数のもつとも多いときは、停車場の広場が人でぎっしりとなつていた。普陀山の一九八四年の観音菩薩の誕生日（農暦二月一九日）の場合、普濟寺は一晩中焼香のための人々が続き、八千人に達した。道教の第八洞天の茅山は、伝説では西漢の景帝の時代に、咸陽の茅氏兄弟がこの山に廬を結んで修真し、以後ここでは陸修靜や陶弘景ら、多くの道教の思想家が現われ、上清派あるいは茅山派と呼ぶ一派を形成し、影響は江蘇省、浙江省、安徽省などの地に普く広がつた。今でも香を捧げる時期になると、焼香する信徒達は最盛期には二三万人に達している。

天主教やキリスト教の伝来と海上の交通運輸の発達、特に近代史の一連の事件とは関係があり、このことで沿海地区における発展はとても盛んである。ある地区、たとえば上海の青浦県は今でも天主教徒の居住地区である。『江南伝教史』の記載によれば、清の康熙帝の時代、江南の水郷にはすでに漁民教徒（自ら「網船教徒」と称していた）がいた。一七二四年、雍正帝の治世のもと、天主教の宣教師が禁止されてから、江南の宣教師は普段は「網船教徒」の漁船に隠れ、昼は寝て夜出かけた。こここの漁民が天主教を信じてゐるのはすでに二三百年の歴史がある。解放の初期、青浦の教徒の人数は九千から一万人であった。現在、五月になると、佘山に上つて礼拝する漁民教徒の人数は多く、一日四千人以上になる。一九八四年末のキリスト教内部の不完全なる統計によれば、浙江省、福建省、廣東省三省の教徒の人数は総じて九八万七一九人であり。全国教徒の総数（三百万人と計算して）の三三・六パーセントを占める。このような状況と、近代史の上でもつとも早く開放された五つの通商港の内、三つがこの三省のなかにあることは直接の関係がある。一九二二年出版の『中華帰主』の記載によれば、これらの省市では、一八四二年の前後から外国の宣教師がキリスト教の布教活動をはじめ、当時の三省の教徒の人数は総じて一二万七七四〇人であり、当時の全国の教徒総数（三四万四九七四人）の三七パーセントを占めていた。六十年の間に、教徒の絶対

数には極めて大きな増加があるが、しかし、全国の教徒の数に占める百分比は六十年以前と基本的には近く、これは宗教の伝統が一定の地区に影響を与えてることをよく説明している。

各宗教が歴史の上で形成した独特的宗教儀礼と布教の方法は宗教伝統の影響の重要な要因であり、今でも一部の人々に一定の吸引力を持つている。たとえば仏教や道教の法会や道場は、信仰を持たぬ人々にとってはあたかも宗教芸術の出し物を観賞するようであるし、信徒達にとっては宗教的感情を満足させるものである。仏教はまた法師の伝授や文字を通して教義を広めている。ここ数年来の仏学院や僧伽培训班のメンバーへの出願を通してみると、多くの人が『阿弥陀経』『印光文鈔』などの仏書を読んで仏教を理解し、ある者は法師と個人的に交際し、和尚を拝して師匠とし、仏教の知識を得ていている。

キリスト教の布教活動にはそれ自身の特長がある。旧中国においては教会は医院や学校の経営、あるいは街頭での布教などの方法で人を教えに引き入れた。現在、付属の機構はすでに教会から離れ、街頭の布教も自発的に停止したが、しかし伝統的なやり方の布教は依然として行なわれている。牧師は人々がよく知っている言葉を使い、日常生活のさまざまな経験と結び付けて、教会内で通俗的に『聖書』の文言を解釈し教えを広めている。聴衆とともに賛美歌を歌い、それが信仰を持たぬ人々に新たな興味を引き起こしている。農村で歌われる短い歌は多くは自作の歌で、民謡の調べを使い、さらにわかりやすく、学びやすくして、その宗教内容もそれに伴って早く伝わっている。キリスト教の伝統によれば、聖職者が教会内で布教するだけではなく、教徒は誰でもその「成果をあげる」（すぐ新教徒へ発展するかどうかはさておき）へと励まされ、「証拠をみせる」（本人の信仰の経験を話して、信仰を持たない人をつれて教会に来て教えを聞かせている。近年、キリスト教に興味を持つ人が増え続けていることと、このような伝統的布教活動とは一定の関係がある。

指摘しておくべきことは、ある地方での鬼神の観念と鬼神崇拜の流行も、人々が信仰を持つ原因の一つとなっていることがある。我が国の大民族の人々の中では、鬼神の観念が非常に一般的であり、鬼神に対する崇拜には、極めて深く厚い大衆的な基盤がある。毛沢東はかつて、旧中国には封建的な宗法思想と制度を組織している四つの権力があると語ったが、その中の一つが、つまり「閻魔大王、県の守り神にいたるまでの冥土の体系および玉皇上帝からよろずの神にいたるまでの神仙の体系——これを総称した神冥の体系（神權）である」（毛沢東選集一上、日本共産党中央委員会出版部）である。神權と政權、族權、夫權はともに中国人民を束縛する四本の繩となっていた。旧中国の広大な都市と農村のいたる所で城隍廟・土地廟が見ら

れ、人々はそれらが下界の平安を保護するものと認めていた。

先に述べた鬼神の観念および崇拜の習俗は、宗教とは同じものではなく、この類の考え方をもち、活動を行なっている人は宗教徒ではない、これらの人々は鬼神崇拜に満足して宗教を信仰しない。しかし鬼神の観念も、結局のところ超自然の力を信じるという特長を持つ点では原始宗教の習俗の延長である。鬼神を崇拜する人は、ある条件のもとでは、また宗教信仰に転向する可能性を持ち、ここ数年来、我々は調査のなかでこれと関係する二つの状況のあることを発見した。

一つは宗教信仰を鬼神の考え方を深めることであるとし、宗教を信じるのは鬼神の指図だと考えたり、あるいは宗教の神を、もとから信じていた鬼神に、さらに靈験をえたものと考えて、宗教に改信するものである。たとえば福建省のある家族は占い師の「彼らの運命は出家するようになつていて」というのを聞いて、それを本当のことと信じ、夫婦は子供一人とともに、出家してしまった。キリスト教のある農村の教徒の信仰は精神病を患つたことが原因で、それは魔鬼が纏わりついているからと考え、彼らはヤソは魔鬼以上に力があって、魔鬼をやつづけることができると信じて、ヤソの「悪魔払い」を求めた。

もう一つの状況はもつとはつきりしていて、我が国の法律は人民の利益を保護し、神官や巫、運命、占卜などの迷信の違法活動を取り締まることをはつきりと公布しているが、しかし宗教信仰は公民の基本的民主的な権利として、保護を受けている。そのためある地区では、もともとは鬼神や運命を信じていた人も、宗教に転じ、宗教を發展させたのである。江蘇省や河南省などの地での調査ではいざれもこのような状況を見いだした。

(二) 宗教的色彩を持つ民俗や民族文化の伝統

スター・リンは民族についてつぎのような定義を下している。「民族とは言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあらわれる心理状態の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された人々の堅固な共同体である」(スター・リン全集二) この四つの特長のうち、「文化の共通性にあらわれる心理状態」とは民族文化と民族の生活様式、風俗、習慣を包含したものである。宗教信仰もまたその組織の一部分である。

我が国は漢民族の文化の歴史のなかで、仏教と道教は、哲学・文学・美術・音楽などの精神形式と結びついて、独特な特色をもつ宗教文化を形成し、その影響は広い範囲のイデオロギーの領域に伸張した。我が国が社会主義社会に進んで後、宗教の典籍、偉大な寺塔の建築、神像の彫刻、宗教を題材にした文芸作品などは、いまでも人々に宗教の伝統の情報を伝えている。

一般的にいえば、宗教の情報は決して宗教への信仰を導きだすものではないが、しかし人々が宗教文化を理解する過程においては、逆に宗教に対する物珍しさや探求心、興味を起させることができ、わずかでも心に求める人は、この過程で宗教を信仰することとなる。たとえばある知識分子は、心から仏教学、道教学を研究したことで、仏教、道教に対して信仰を持つようになつたし、ある文学や美術を愛好した青年は、宗教の学術的な価値を検討する中で、宗教に興味を抱くようになつたし、ある人は神話小説を読み、宗教を内容とする映画を見ることで、宗教的神秘感を起こし、すんで宗教的人生観を受け入れた。

ある中学を卒業した青年が言うには、以前は寺も僧侶も見たことがなかつたが、しかし彼が『少林寺』の映画から得た印象は、寺の僧侶は正直でおもねらず、ただ武術に精通しているというもので、そこで仏門に対して尊敬と羨慕の心を起こしたという。

我が国のいくつかの少数民族は、ほとんど民族全員が同じ宗教を信仰している。歴史上、チベット族とイスラム教を信仰する少数民族について述べるなら、寺院は宗教活動の場所というだけでなく、また民族文化を伝達する中心であつた。ラマ教寺院の中にはチベット族の豊富な歴史文化などの伝統的資料が保存されている。医者が居らず、薬の少ないチベット族の地域では寺内のチベット人医師は、人々が病気となつたときに診療を受けられる唯一の救いの神であつた。我が国の清真寺は一六世紀には教会での教育の伝統が始まり、教長が教徒の子女を指導して『コーラン』などの宗教典籍を学ばせたことから、後には一般の文化知識を講ずるようになつた。解放の後は、宗教と教育をわけるという原則が実行され、このような状況には変化があつたが、しかしその影響はゆるがせにはできない。

宗教はまた少数民族の生活様式と節日や飲食物など各種の習俗のなかに浸透している。たとえば西北のイスラム教徒の居住区では、子供が生まれると清真寺に出かけ教名を付けている。新疆ではイーシヤン派を除けば、そのほかの教派はどこでも入信の手続きを必要とせず、モスリムの家の子供に生まれたらモスリムであり、青少年は幼いころから宗教の潜在的な影響を受けることになる。イスラム教を信じる少数民族は豚、驢馬、驥馬およびあらゆる凶暴な禽獸の肉を食べず、あらゆる動物の血と、自ら死んだ物を食べることを忌み嫌うが、この定めは『コーラン』の、それらは不潔なもので食用できないという教えに根源を持っている。チベット族では、死後、天地の間のあらゆるものは水、火、風、土の四大によつて作られているから、遺体は原形に帰るべきだという信仰を根拠として、風葬、火葬、土葬、水葬を行ない、いずれも宗教儀式を行なうことをもとめている。タイ族の水かけ祭りは元々は全村の老若男女が新年に当たつて、仏教寺院に集まつて水をかけて仏像を洗つたことに

始まり、後にはお互に水を掛け合い、そうすることで消災益寿ができると考えている。イ族の火把節は元々は田の神の祭りであり、火で鬼や邪を払う意味があつた。この類の宗教的色彩を帯びた人々の、節日の活動と伝統的な婚姻葬送の儀式では民族性や大衆性が顕著である。

我が国は社会主義国家であり、政府は民族政策、宗教政策を貫徹することを堅く決意しており、宗教信仰自由の原則を根拠として、少数民族においても宗教を信仰する自由があり、また宗教を信仰しない自由もある。少数民族の地区の信仰にはもはや強制的な規定はなく、民族の成員が必然的にある宗教を信じているということを意味していない。しかし少数民族のなかで、宗教はすでに民族の文化や生活、習俗と密接に結びついており、相当長期にわたって、宗教は伝統的な方式にもとづいて確かに継続するであろう。我が国の少数民族地区におけるこのような伝統の影響は、漢民族の地区より強いものとなつてゐる。

（三）少年や児童に対して顕著な影響を持つ家庭の伝統

家庭は社会の細胞であり、その変化と、社会の経済や政治制度の発展とは密接な関係がある。我が国は、長い間封建社会と半封建社会の中にあり、宗法制度の影響は深刻なものがある。家庭のなかでは父權を代表とする家長制をとり、さらに儒家は孝道を宣揚して、子女が例外なく父母の意志に服従することを要求した。このため我が国の家庭の生活では、子女に対する父母の影響はとても大きなものがある。教徒の家庭では、父母はつねに次の世代に同じ宗教を持つよう望み、このような状況は社会主義社会の内部にあってもある程度存在していた。別的一面では宗教徒の家庭内で作られる宗教的伝統の雰囲気は、長い間耳目に馴れ親しむことで、家庭の成員、特に児童にとってさらに深い影響を与えた。

私たちが数箇所の仏学院や僧伽培訓班で行なつた調査では、仏教を信じている家庭を出身とする学生がかなりの比率を占めるることを示した。一九八三年、一回目の抽出調査では三〇余名の学生のうち、半数以上が、幼いころから父母や親戚の影響で信仰していた。ある父母は三宝に帰依する在俗の弟子で、毎日朝夕家で勤行を行なつており、その子供達は見て心に留めたのである。ある人は七歳ころからいつも寺へ行つて仏像を拝み、ある人は八歳ころから父母とともに精進料理を食べ、一〇歳では父母とともに読經した。ある人は幼いころから和尚になる志を立て、大きくなつて軍隊から帰つても初心を変えず、彼自身の言葉で言うなら「仏教信仰は私の幼いころからとっくに私の心中に根を下ろしてゐた」ことになる。

天主教は「伝代教」と呼ばれている。その教規によると、父母は子供らが幼いときから宗教教育を行わなくてはならず、こ

のため宗教を信じている家庭の子供に対する影響はさらに明らかである。現在篤く天主教を信じている中年、老年の教徒の大多数は、生まれて数日して教会に連れていかれ洗礼を受けている。青浦県の「網船教徒」はかつては学校に行く力がなかつたが、しかしみな教会の「読經班」に進み、『六様経』と『教理問答』を暗唱できるようになり、一〇歳前後で初告解、初領聖体、領堅振（宗教上の儀式を指す）を行ない、宗教上の習慣はすでに彼らの日常生活の一部となつていた。都会出身で、天主教を信仰した歴史が比較的長い教徒の家庭の知識分子は、幼いときに洗礼しただけでなく、教会の学校できちんとした天主教の教理の教育、——そこには教義や教会史、護教学などが含まれる——を受け、このことは彼らの世界観に相当な影響を与えた。近年の天主教内の、洗礼して入信した青年教徒は、過半数が宗教家庭の出身である。青浦県では一九八一年から一九八三年に至る三年間に一五〇名の教徒の家庭の子女が洗礼している。

キリスト教を信仰する家庭の、子女への影響も天主教と似ている。教徒の居住区のある青年は、「私は母のおなかの中にいるときから信仰している」という。調査によれば、ある地の神学院と短期訓練班の九一名の学生学員（みな二〇歳から三〇歳までの青年）の内、七五名は教徒の家庭の出身であり、総数の八一、四パーセントを占めている。そのうちのある学生は生まれる前から、父母の「神に捧げる」（注・神の許しを願い、子供が大きくなつたら、聖職者にする）約束のもとにあつた。上海のある教会の聖歌隊に参加している青年は、ほとんどすべてが教徒の子供であり、そのうちのある者はもう第三代あるいは第四代の教徒である。これらの青年のある者は一九八〇年以後にはじめて洗礼を受け、正式に入信しているが、しかし彼らは誰もが幼いころから宗教的な生活の薰陶を受けていた。

以上の事例はまた一〇年の内乱の期間、公の宗教活動は禁止されたものの、家庭の中では宗教教育が依然として行なわれていたことを示している。福建省のある僧尼は、迫害され、還俗し結婚して子供を生んだが、しかし信仰を捨てることなく、かえつて子供に宗教的な影響を与え、政策が落ち着いた後には、子供とともに寺へ行き、仏に帰依し、ついには出家してしまつた。上海の一人のキリスト教の家庭に生まれた女の子は、文化大革命の期間でも家庭の影響で、食事前には相変らず祈りを続けた。彼女が幼稚園に進んだ一日目、ほかの子供が食事前に祈らないことをとても不思議におもい、そこで無邪気にも先生に、どうして幼い友人達は食事前に祈らないのかと質問した。この問題の出され方は幼稚であるが、かえつて宗教を信じている家庭には次の世代に与える巨大な影響があり、たとえ「歴史に例のない」ような日々においても、中断しなかつたことを生

々しく説明している。

「家」を単位とする伝統的な宗法思想は、教徒の家庭の青少年への影響のほか、家庭内のはかの成員にも影響がある。たとえば近年の農村では、ある人が病気で入信したとき、病人本人が信じるだけでなく、その家人もまた往々にして追随して信仰している。彼らは家族全員の信仰が病人の快癒の一助になると考えており、さらには将来家族のうちの「ある者は天国で幸福となり、ある者は地獄で苦しみを受ける」と述べている。

第二節 社会的な原因

唯物史観に照らしてみれば、宗教というこの種の現象は「一定の歴史的時期の物質經濟や、生活条件によつて説明される」（マルクス・エンゲルス選集二）ものである。この一定の歴史的時期の中にあって、過去の残した歴史的な伝統は依然としてその影響を保つてゐるが、しかしそれらは当時の社会的な条件と結びついたときに、はじめて作用するものである。だから、宗教徒の信仰の原因を理解しようとするなら、必ず彼らが身をおく社会の状況について研究しなくてはならない。

原始人の宗教信仰で主要なるものは自然的要因によるものである。社会の生産力の発展に伴い、原始人の思考能力も強まり、彼らはその生存と直接関係する自然現象にたいして最初の抽象化を行なつた。その思考能力が未だに低いレベルにあつたために、彼らは自然現象にたいして正確な知識を持つことができず、そのため、世界と人間とはいすれも物質と神靈、肉体と靈魂という二重の性質をそなえていると考えた。彼らは夢、幻といった生理的現象を理解せず、靈魂が体を離れて単独で存在したり、また靈魂は不滅であるといった考えを持つた。雷や暴風、地震などの自然現象、また自然災害にたいして恐怖の心を持ち、天地などの力を人格化し、自らと異なつた力と思い込んで崇拜した。

階級社会においては、自然的要因が依然として作用を持つてゐる点を除けば、社会的原因が人間の宗教觀念の発生に主導的立場を占める。すなわち階級の抑圧が生みだす盲目的な勢力と深刻な苦難が、宗教を居座らせるもつとも深刻な社会的根源である。まさしくエンゲルスが言うように「けれども、物質的な救済には絶望していても、その代用としての精神的な解放を、つまり彼らを全くの絶望から守ってくれるような、意識における慰めをさがし求めていたある数の人たちが、すべての階級をつうじていたにちがいなかつた」（マルクス・エンゲルス全集一九「ブルーノ・バウアーと原始キリスト教」）のである。

我が国の社会主義社会は、数千年の歴史を持つ搾取制度を消滅させ、労働する人民を、階級的抑圧が作り出す巨大な苦難から抜け出させて社会の主人公としたが、これは天地をひっくり返すほどの大変化であった。搾取制度と搾取階級が消滅したことにより、宗教が居座る階級的根源はとっくになくなつた。これが問題の一つの方面である。

別的一面では我が国の現在の段階は、未だ社会主義社会の初級の段階であり、やつと半封建、半植民地主義の社会から抜け出したところであり、そのため我が国は各方面、経済や道徳や精神のいずれの方面でも、我が国が抜け出してきた旧社会の痕跡を留めている。「社会主義の改造が基本的に完成した後にあっても、我が国が解決しなくてはならない矛盾は、人民が日々増進させている物質文化の需要と立ち遅れた社会の生産との間の矛盾である」（『建国以来の党のいくつかの歴史的問題に関する決議』）。社会の生産を発展させるためには、社会の生産力の発展と向上に努めるだけでなく、生産関係の改革と完全化をはかり、そのうえで上層の建築を改革し、完全化させる必要がある。このような歴史の過程にあっては、各種の社会的矛盾はどれもが人々の頭脳に影響を与える。一定の条件のもとではそれらは一部の人が宗教を信仰する原因となる。

一、ある程度の貧困や落ちこぼれの現象は依然として存在する

レーニンは言う「宗教的偏見のもつとも深い根源は貧窮と無知であつて、われわれはこの害悪とたたかうべきである」（レーニン全集二八「婦人労働者第一回全ロシア大会での演説」）。我が国は社会主義制度の建設は生産と文化を発展させて基礎を固めた。三〇余年この方、我が国はすでに独立した比較的ととのつた工業体系と国民経済の体系を建設し、農業生産の条件は明らかに変化を起こし、生産水準も大きく向上し、文化教育の事業にもまた巨大な進展があつた。しかし過去の一時期、私達は工作の重点を生産力の発展に移すことができず、歴史が残した一部の地区的貧窮や落ちこぼれの現象は長きにわたって根本的变化をとげることなく、社会における一部の人々は物質生活と文化生活の基本的な要求が満たされないことで、宗教信仰に走つた。「大躍進」運動の誤りは国民経済に深刻なる挫折を与え、人民の生活は大きな影響を受けた。六〇年代の初頭、我が国はまた大きな自然災害に遭遇した。「文化大革命」という一〇年の大災害は社会の生産力に深刻な破壊を与え、このためある地方の信仰を持つ人数は増加した。数年前、農村の新たに出来た僧尼のある者は生活の貧困によつてであった。仏学院や神学院へすすんで学習することを望む青年のうちのある者は貧困な地区から来ており、宗教を職業として、生きる手段にしようとを考えていた。ある地方のキリスト教の発展が比較的早いのも人々の生活が苦しいことが生みだしたものである。たとえば

江蘇省北部の地区は農業技術の立ち遅れにより、土地利用が行き過ぎ、肥料が欠乏して土地が瘦せてしまい、そのうえ有効な水利事業もなかつた。このため過去には雨が降らなければ干魃となり、一度雨が降れば水浸しとなつて、農民はときには一粒も収穫がなく、生活がひどく苦しいこともあつた。党の一一期三中全会の前、農民の食料はいつも不足し、ある人は省の外、県の外へ避難して生活の道を計つた。このような貧窮と落ちこぼれにたいして、なすすべのない状況から脱出するために、ある人は神靈の助けをもとめて豊作の希望を託した。このような現象は生産力が発達していない山間部や辺疆の地区のどこにも見られた。

経済が発達していないために、文化や教育の事業も自ずと発展しえなかつた。一九八二年の我が国の人口調査の数字統計によれば、我が国の文盲率は二三・五パーセント、二億人以上に達する。貧困な地区での割合はもつと高い。たとえば江蘇省北部の某県の文盲者は総人口の三七ペーセントであり、老人の文盲だけでなく、青少年の文盲もまた少なくない。この地区的教育事業はほとんど発達しておらず、農村の小学校では「三泥」の呼び名があつた。つまり「泥の教室、泥の机、泥んこの子供」のことで、設備は御粗末で、先生も生徒も不足していたのである。このような地区に人々は科学的な知識がなく、簡単に宗教思想と伝統的な鬼神の観念の支配を受け、甚だしいときは迷信やデマを信じて、さまざまさわぎを引き起こしている。たとえば江蘇省邳県には黄石公の廟（黄石公は道教の神仙である）がある。解放戦争のときに壊されたが、地面にはまだいくつかの字の跡がぼんやり残つた石碑が残つていた。一九七九年の二月から三月の間、突然、黄石公が戻つてきて、世の人の病気をなおす「仙薬」を下すという話が伝わつた。この間、江蘇省および邳県だけでなく、山東省や河南省の地からも三万人以上の人人が押しかけ、黄石公の廟の旧址に供物をそなえ、さらに白い紙で紙筒を作り、風が塵を吹き上げるまで待つて、筒に溜まつた泥や砂を「仙薬」として家にもち帰り、病人に飲ませたのである。この事件は前後十日間以上にわたり、社会の秩序に深刻な影響を与えた。

一部の辺疆の山間部の農村は、人々の文化的な生活が非常に低く、ある程度教育を受けた青年達、また労働し、食事し、眠るという単調な生活のあり方に満足していない人達のある者は、宗教的な読み物や宗教活動に興味をもつようになつた。浙江省のある青年は宗教活動のなかの、グループで贊美歌を歌うことに快さを覚え、キリスト教を信仰するようになつた。某県では一年に一度、信仰をもつ青年が一緒に贊美歌を歌う会を組織し、参加者は数百人いて、大規模な合唱会に等しいものとなつて

いる。河南省にもまた一部の農村にキリスト教の集会所があり、贊美歌班と楽隊があり、アコーデオンや笛、弦楽器、ハーモニカなどの合奏を組織して、教徒の冠婚葬祭には出かけていって参加し、青年達に強い吸引力をもつてゐる。

我が国における当面の生産力の水準では、まだ一部に自然条件の影響を受けることが大きく、危険性が高い作業、たとえば海洋、漁業、鉱業、林業などがある。これらの職業に従事する人々やその家族は、いとも簡単に自然の威嚇に恐れを抱いてしまい、そのために多くの人々は宗教に神の助けを求めることとなる。たとえば舟山列島は全国に名の駆せた漁場であり、そこの人々は水産や漁業をおもに行なつてゐる。海上の厳しい波風はしばしば多くの家庭で夫や子供を失わせ、家庭を崩壊した。建国以後、漁船の設備は新しくなり、気象情報や各種の通信設備は、漁民達を海の災難から逃れさせらる様になつた。しかし天気が突然変わつたときなどは、猛烈な波風から逃れることはできない。平安を求めるために漁民は、出漁の前には「救苦救難」の觀音菩薩の像の前で敬虔に礼拝することとなる。

病気はほとんどの地域で人々の心の中における、一種の捉えようのない主要な災害であり、農村、山間部では経済の停滞、交通の不便、医者が居らず薬も少ないとことから、病気になれば、病院への道は遠いために、家族は生産をやめて病院へ連れていくなどし、困難が多い。たとえ診察が受けられたにしても、費用は自前であり、人によつては負担することができないでいる。もし中心となる労働力をもつ人が病気になつたら、家庭経済への影響はもつと大きなものとなる。近年、キリスト教が農村で発達するのが早い原因の一つは、ヤソに祈れば病気をなおすことができ、お金もかからないと宣伝する人があるからである。一部の人は天の命を聞くといふ受けとめ方で、試しに宗教信仰に救いをもとめている。社会の物質的基礎というところから分析するなら、病気で信仰に入るのは、貧乏や落ちこぼれ、衛生事業が発達していないことの複雑な反映である。

二、宗教とその他の旧社会の意識との相互作用

かつてエングルスは、歴史的闘争の進捗を決定するのは経済的な基礎であるが、しかし経済的因素が唯一の決定的な要因ではないと強調した。「経済的状態は土台であつて、上部構造の種々な要素——階級闘争の政治的形態及び結果——戦いに勝つたのちにその勝つた階級によつて確立される諸制度、等々——法律の諸形態、そればかりでなくこれらすべての現実的闘争がそれに参加する者の脳髄に反映したもの、すなわち政治や法律や哲学の理論、宗教観及びその教義体系への発展」(マルクス・エングルス全集四『ヨーゼフ・ブロッホへの手紙(一八九〇年九月二二一二日)』)。我が国の社会主义社会において旧社会が

残した古い意識、古い慣習は依然として一定の働きをなしており、社会主義の新思想や新風と絶えず矛盾を起こしている。一〇年の内乱の間、封建主義が残した思想、資産階級の腐り切った思想はさらに猖獗を極め、その影響はいまもある程度存在している。

男女は平等ではなく、女性が蔑視されているのは、我が国の社会生活ではかなり目立つ封建思想の影響である。たとえば農村においては女子が教育を受ける機会は男子よりも少なく、青年の文盲は女性が男性より多い。江蘇省某県某郷の統計によれば小学校の男女の数は同じであり、中学校でも四〇パーセントを占めるが、高校の女生徒は一五一二〇パーセントを占めるだけである。浙江省のある地区の多くの女性は生産に参加できず、経済的に男性に頼っている。ある都市では労働者募集にあたつて、女性蔑視の現象が見られ、女子青年の就業の機会は男子青年より少ない。これらのことは女性に、自分の運命が捉えようのないものを感じさせてしまう。調査は各宗教のいずれの信仰においても、女性の比率が比較的大きいことを示している。

一九七九年から一九八二年の上海のキリスト教の洗礼した人数のうち、女性が七七、三パーセントを占める。一九八四年の觀音の誕生日の前夜、普陀山の仏教の三大寺院の大雄宝殿で、仏像を礼拝する参詣者は、一時間に一四〇五人を数え、そのうち、女性は一一六人、八〇パーセントを占めていた。近年、宗教を信じる青年のうち、女性は男性より多いが、このことと、彼女らの社会的地位には一定の関係がある。このほかある地方では未だに売買婚の風習が見られ、男性は妻を娶るのに、女性がたに多額の結納金を支払っている。しかしキリスト教を信仰する女性が嫁ぐときには物質的要要求をすることは比較的少なく、男性もまた結婚のために出費することは少ない。しかしキリスト教を信仰することも、古い習慣や勢力の影響に対するある種の逃避と反抗なのである。

農村にはまた家庭内の揉め事の悩みから抜け出るすべがなくて信仰する人が少なくなく、この類の揉め事は、多くが貧乏と愚昧が産み出した心の狭さや私利私欲を計ったこと、相手を尊重しないことなどによっている。ある地方では、かつては母親が息子の嫁を威圧したが、現在では逆に息子の嫁がもつと性悪で、もし男の子でも生めば眼中に人なしで、母親はいつも虐待されている。ある地方では男性が凶暴で、妻を打ち罵り、家庭内の問題が大きくなり、甚だしいときは服毒自殺という惨劇すら生んでいる。家庭内の揉め事にたいして手の下しようのないとき、一部の人は宗教のなかに慰めをもとめてしまう。キリスト教は、農村では孝の道や、性格を変え善人になるなどと宣伝している。たとえば安徽省の某地ではキリスト教は自ら『十勸』

なる歌を作っている。歌詞では「一つ婆様良く聞けよ、けつして嫁と争うな……食べ物着る物嫁より少なく、嫁をかわいがれば主も喜ぶ」「嫁さんよく聞いてくれ、決して婆様と争うな、……婆さんによくすれば、神様は幸せをくださる、嫁さんをもらつたら自分と同じ、賢い嫁は名を残す。」これは明清代に流行した勸善書と一脈通づるものがある。この類の宣伝はかなりの効果があるという。この地区のある女性が口喧嘩をしたところ、夫はすぐ「君はヤソを信じなさい」と言つた。

古い意識は幹部のなかにもあらわれており、官僚主義がもつとも目立つてゐる。鄧小平は言う「党と国家の指導体制、幹部制度の面から言うなら、主たる弊害は官僚主義の現象や権力が過度に集中する現象、家長制の現象、幹部指導職の終身制の現象、そしてさまざまなる特權の現象である」（『鄧小平文選』）。中国共産党のすぐれた伝統の一つは、人々と密接に連係して人々と同じ道を歩むことにある。すでに社会主義革命が勝利を得て数十年の後にあって、大多数の幹部は比較的好ましくこの伝統を継承しているが、しかし一部の幹部は官僚主義の空気に汚染され、人々の病の苦しみに無関心で、勝手に特殊化している。調査によれば、一部の人々が生活や仕事のなかで、さまざまな困難にあっても関係部門と幹部は、彼らにたいして心を配り助けるべきときに何もせず、人々を絶望の淵に立たせ、一転して宗教に慰めを求めさせている。たとえば某市の若い女性は頭を使い過ぎて神経衰弱になり、進学できず、仕事についても一度にわたって退職させられ病気はますます悪化した。後に彼女は教会で同情や思いやりを寄せられ、ある人が彼女にヘレン・ケラーについての本を与える、彼女は再び新しく生活する勇気を奮い起こし、敬虔なキリスト教徒になった。某地のある女性幹部は家族が多いために負担が重く、長い間経済的に苦しかったが、しかし組織の配慮を得られず、悩んだ末に仏教に帰依し、敬虔な仏教徒になった。

一部の幹部は権力によつて私利をばかり、ある地方の人々は彼らにたいして賄賂を送らないわけにはいかず、経済的に困難な人は負担に耐えきれず、ただ神に助けを求めるだけであった。たとえば某地の農村では青年は軍隊に入つたり、工場労働者になることを望み、漁村の青年は経験や技術の優れた船や大先輩の船にのることを希望している（漁獲量と収入とは大きな関係がある）が、審査の権限はすべて少数の幹部の手中にあり、彼らの援助をうるにはすべて贈り物を必要とする。このような不正の風は人々に一部の幹部を「活き菩薩」と呼ばせることとなり、彼らに「焼香」する力のないものは、ただ泥の菩薩を求めるだけであった。舟山列島のある漁民は経験のある大先輩の船にのることができるように希望したが、幹部へ贈り物をする力もなく、自分で立てた小さな廟で、仏を礼拝し、おみくじを引くだけであった。

さまざま古い封建思想と資産階級思想の影響にたいして、多くの幹部と人々は決して満足していなかつた。彼らは汚濁に甘んじはしなかつたが、汚れた垢を落とす力がなかつたので、身を清めて自らをよくし、世俗を怒り、身を宗教の世界に避けた。ある青年の言うところでは、彼は新社会にうまれ、紅旗のもとに生き、はじめて社会に踏み出すときにはすべてが美しく好ましいとの理想を抱いていたが、しかし社会のいくつかの醜悪な現象は彼を困惑させ、意氣を沮喪させた。彼はこのような現象の根源を正しく分析して積極的に対処できなかつたために、宗教の遁世の思想を受け入れてしまつた。

三、工作中の誤りと失敗が人々に困難をもたらした。

社会主义の制度を強固にし完全にするのは長い道のりである。資本主義や封建主義と比べるなら、世界における社会主义運動の歴史は短く、社会主义国家の歴史はさらに短く、そして社会主义社会の発展の法則はまだ探索の過程にある。

我が国は、半植民地・半封建主義社会から、新たな民主主義革命を経過して社会主义社会に進んだのであるが、中国的特色を持つ社会主义国家を建設するには、マルクス主義の指導のもとで、我が国の国情と結び付けなければ、困難なる探索を進めることはできなかつたのである。このため探索の過程において、誤りや失敗が生じるのは避けがたいものがあつた。

我が国の社会主义の改造が完成して後に、社会主义の経済建設についての経験不足から、やみくもに邁進したり、成功に急だつたり、政治の上で、誤って階級闘争を中心として、政策方針のうえで「左」の誤りを犯し、特に「文化大革命」というようないふな、全面的、長期間の深刻な過ちは、国家と人民に災難とも言える結果をもたらし、一部の人々に、運命の悪戯を感じさせてしまつた。一部の群衆は、現実に失望を感じたとき、たちまち宗教に精神上の慰めを求めることとなつた。

「文化大革命」の最中、多くの幹部と知識分子、さらにその親戚達が受けた苦悩は深刻で、あるものは無信仰から信者に転じ、信者は、そう深く信じていなかつた人が熱心になつた。たとえば福建省のさる県の幹部の家族は夫が迫害されて死んでしまい、心の痛みのために、たちまち仏教を敬虔に信じるようになった。彼女は自分が精進料理を食べ念仏するだけでなく、布教して、寺を修復し、宗教徒の中堅となつた。山東省のある県の、信仰の度合いの薄い一人のキリスト教徒は、「文化大革命」の最中、彼女の病気の夫が乱暴され、瀕死の状態になつたとき、訴えるところもなく、ただ心を込めて祈るばかりで、このことから家中が堅くキリスト教を信じるようになつた。

また多くの宗教徒は「文化大革命」の中で、信仰の問題で迫害されたが、これは彼らの信仰を変えなかつたばかりではな

く、かえつて激しく宗教心をあおり、信仰はさらに敬虔なものとなつた。

このような人は一〇年の動乱の期間に、信仰活動が本当に停止したわけではなく、開かれたものから隠れたものへ、集中したものから分散したものへとなつただけなのである。あるときは特殊なやりかたもあり、たとえば西南のある県のキリスト教徒は、人に見聞きされない空き地で「野原の礼拝」を行つた。貴州省のある地のある教徒は夕刻から朝まで地下室で宗教活動を行つた。入り口の板の上に鳥籠や大小屋を置いて隠し、外には人をやつて見張りをさせた。浙江省温州のある青年は、夜中に数里も歩いて山の上に集まつて礼拝した。当事者の回想によれば、このような秘密の活動は、開かれたものに比べてさらに激しく宗教徒の情熱をかき立てたという。教徒は宗教信仰の故に迫害にあうと、さらに彼らに護教の心を発生させることができ、それがほかの教徒をも一層動搖させなくした。たとえば浙江省のある地のキリスト教徒の多い地では、三人の女性が信仰のために頭を丸められてしまった。彼女たちは「頭は剃れても心は剃られません。私達は神の御前でさらに一步進みました」という。あるところでキリスト教徒が逮捕されたとき、ほかの教徒は知りあいであろうがなかろうが、誰もが日用品を送つて慰めた。

一〇年の動乱の時代、人々は自分の身に直接の災いがなくても、将来が明確ではないことで、暗澹として宗教に転じてしまつたこともある。たとえば浙江省のある地で発生した鬭争は過激なもので、武力鬭争も頻発し、ある青年はこれらに倦み、争いのない世界を幻想して、仏教だけがこのような理想を実現できると考えて、出家して僧となつた。福建省のある県の八百余名の僧尼のうち半数以上は「文化大革命」の時代にこつそりと出家した人たちであり、このことは当時の社会の状況と疑いもなく直接的な関係がある。

インテリ青年が「上山下郷」（農山村に長期滞在し、建設に協力しながら思想改造をする運動）したとき、ある宗教を信じている家庭の子供も農村や辺境の地にかけた。彼らはもともと家庭の伝統的なやり方にならって、教えを信じただけであるから、個人の信仰は必ずしも敬虔なものではなく、しかし労働は重く、生活は単調で、関心を寄せるものとてない状況のもとで、心の煩悶によつて、自ら宗教のなかに慰めを求めることがなつた。あるキリスト教徒家庭出身の青年は、挿隊（人民公社の生産隊に入隊して活動すること）期間の長い間、宗教の歌を歌うこと自ら楽しみ、『聖書』を読むことで悩みを解決し、しかも思想の上では、消極的な宗教的人生観の内容にとくに共感をおぼえていた。

四、海外の宗教勢力の影響

宗教には国際性がある。我が国が対外開放を実施するにともない、宗教の分野での内外の関係も、必然的に日増しに頻繁となつており、我が国の宗教も海外の宗教の影響を受けないではいられなくなつた。

建国以来、我が国の各宗教は独立自主を堅持するという原則のもとに、国外の宗教界の人々との関係を作り、宗教の分野のさまざまな活動と学術研究を行なつた。このことは我が国人民と各国人民との友好を増進し、世界平和の維持に有益であったが、同時に宗教の上での相互の影響は避けられないのでもあつた。ある外国の友好的な人々は、宗教の不足するものを補いあうという伝統的な習慣を根拠として、自発的に我が国の宗教事業のために、物質的な援助を行つたが、そこには無条件で贈られた図書や宗教用品などが含まれていた。

我が国の海沿いの地区の寺廟は、東南アジアなどの地にある程度の下院（つまり付属の寺）をもつており、国外の華僑も仏教を篤く信じ、華僑僧になつてゐる人もいる。

ここ数年来、彼らは祖国と宗教の二重の感情によつてしばしば故郷に帰り、親戚を尋ねたおりに寺廟の修復に寄付をしている。福建省のある大刹はこれにより面目を一新した、このことは、祖国の文物を保護するうえで有益であるが、当然ながら仏教の存在と伝播にかなりの影響を与えた。

このほか海外の宗教界が宗教伝播の願いで、さまざまなやり方をとることが、我が国に宗教伝道の影響を拡大している。たとえば「文化大革命」が終わつて後、天主教やキリスト教が活動を再開した当初、『聖書』や讃美歌などのテキストの印刷が間に合わず、外国の教徒や、国内の教徒の海外の親友たちがさまざまな方法で輸入したのである。帰国して親戚を訪問した教徒が贈つたり、華僑の同胞、台湾の同胞、香港、マカオの同胞などが持つてきた『聖書』が、親友の信仰を励ました。

我が国の辺境の地区での外来の宗教の影響はもつとも顕著である。
ある少数民族は国境線の両側に別れて住んでゐるが、多くの人々が親戚の関係にあり、両者の往来は頻繁で、当然、宗教の上での交流もある。

注意すべきは、海外の敵対勢力が、まさしく意図的に宗教を利用して組織的に、我が国に対して破壊活動を進めようとしたことである。

宗教は我が国の社会主義社会にあっては、もはや再び反動的統治階級が利用する道具ではないが、しかし国際環境は複雑で、海外の宗教界には、依然として少数の反中國分子と海外に逃亡した反動分子の残党があり、彼らは宗教の外套を隠れ蓑として、我が国に対して転覆破壊活動を進めている。彼らは人を派遣して、布教の書籍や録音テープを輸入するなどの方法で、国内の反動分子と結託して拠点を作り、勝手な宗教活動を行つて人々を信仰に引きずり込み、宗教の言葉を借りて、反動政治の宣伝を拡大し、社会の安定した團結と正常な秩序を破壊し、個々の地方では、すでに宗教の様相を帶びた敵対的な階級闘争の事件があつて、宗教の影響はこれによつて、また拡大していった。たとえば「アンドレ兄弟」と名乗る国際的なキリスト教の反共の団体はもっぱら社会主義国家が宗教を迫害しているというデマをなし、宗教の書籍を密かに運び込むことを画策していた。一九八一年六月、この団体は我が国のスワトウ沿岸で大規模に『聖書』を密輸し、我が國の民兵に捕えられ、好き勝手にできなかつたが、デマを流して陰謀活動を進めた。天主教の海外反動勢力は、我が國天主教の独立自主自弁を破壊し、再び我が國の宗教団体と宗教事務を統制支配しようとして、秘密の活動を進めた。このほか、またある人は「十億の中国人の魂に関心がある」として、「中国の福音化」を実行することを名目に、種々なる活動を行い、我が国社会主義の制度を改変することを夢想した。彼らは宗教の外套をまとい、布教の帽子の下に、転覆活動を行い、ある程度は一部の人を欺き、宗教の影響を拡大した。これらは社会主義の時代にあっても宗教が存在する客観的要因の一つである。

第三節 心理的要因

宗教徒について言うなら、宗教信仰は彼らの認識、感情、意志などと関連する一種の心理的活動である。宗教徒の心理にあつては客観的な物質世界と社会の現実とは第一次性なものである。ただし考へるべきは心理や意識は人の頭脳が生んだものであり、まさしくレーニンが「心理的なもの、意識などのものは、物質（つまり物理的な物質）としての最高の産物であり、人の脳をこのようないくつにして複雑な物質的機能と呼ぶのである」（レーニン全集一四）ということである。心理的反映の過程は、主観と客観の統一である。人の生活の仕方、実践の領域、教育の程度、個人の体质、気性などいずれも同じではないことで、人の心理もまた同じであることは不可能である。

宗教信仰の心理をうみだす過程のうちでは、認識の過程がもつとも基本的なものである。人は認識の上で宗教の教義を真理

とみなし、感情の上で相応しい宗教的感情を生み出し行動の上で宗教を信じている意志を表す。この三つは互いに貫しており、互いに制約しあつてゐる。

一、認識の差異

人の認識の過程は極めて複雑であり、正確な認識は「実践—認識—再実践—再認識」という循環反復の規律にしたがつて進行すべきものであり、客観世界の現象が人の五官を通して頭脳のうちにき、感性や知識となり、大脳の整理・分析と総合をして抽象的な理性と知識、つまり思想と概念となる。この種の思想・概念は正確とはいえず、かららずや実践において検証されなくてはならない。人類の認識史は、正確な認識に到達するためには、長期にわたつて、繰り返し、困難な道のりを経なくてはならないことを証明している。この道のりのなかでは、ひずみやあやまちは断えず発生する。それは人の認識が、普通には二つの方面からの制約を受けているからであり、つまりエンゲルスがいうところの「世界の秩序は常に一つの思想の反映であるが、すべて客観的には歴史的状況の制約を受け、主観的にはその思想を反映する個人の肉体的な状況と精神的な状況に制约される」（マルクス・エンゲルス選集三「ドイチエ、イデオロギー」）である。人の意識は、消極的でも、受動的でも、鏡のように機械的に客観を写すものではなく、積極的、能動的にそれ自身の条件によつて写し出していくものである。しかし人の認識能力は、知識の程度、思想の方法、および健康状況など、多方面の制約と影響を受けるものであり、そこには正確に客観を映す可能性があるとともに、また歪曲して客観を映すこともあり、主観が客観から離脱してしまう可能性もある。

宗教はこの種の幻想の反映であり、人の認識の局限性から発生したものである。それは客観的な対象に關係をもつても、未だ認識していないことで、人々が認識の方法のひずみや過ちを犯すことを表している。

原始的な宗教の段階では、認識されない自然体、自然現象、社会現象などは、すべて神として敬われた。社会と科学、文化の発展にしたがつて、人々の客観世界およびその法則性に対する認識は日増しに深まり、宗教のなかに反映するものはしだいに減少した。たとえば過去において我が国では疱瘡が流行し、人々は治療の手段がなく、ただ道教寺院にでかけて「痘神娘娘」に、人間をいじめないように祈るだけであつたが、種痘が発明されて、人類がこの疱瘡の厄病神に勝利して後、今では人が「痘神娘娘」に跪いて願うことはおのずとなくなつた。

しかし見ておねばならることは、現在の科学の発展の水準では、自然界には未だ認識の対象になつていらないものが依然と

して存在し、それらは人々が宗教的な心理を生み出す主たる要因になつておる、特に知識分子の信仰の主観的な原因となつてゐる。

たとえば宇宙や物質の運動についての認識では、人々は宇宙認識の道に大きく一步を踏み出した。過去には解釈不能であった宇宙の現象、たとえば日食月食の成り立ちなどは、すべてとつくり人々の掌握するところとなつた。宇宙船は月面に降り立ち、人々に、月には常娥もダイアナもないことを知らしめた。地球物理と地球科学の発展もまた地下に地獄も閻魔大王もないことを証明した。しかしながら巨視的、微視的、いずれの領域においても、未知なる神祕は数多く存在し、宗教の教義における「神が作った」とか「法相」とかの説法が、その市場となつてゐる。キリスト教におけるある知識分子の教徒は、彼らの宗教信仰が、自然界の「合目的論」を基本としていることを認めてゐる。

ある人は宇宙と物質運動の問題において、宗教的な結論を受け入れ、彼らが認識論の上で正確に掌握することのできない、可知と不可知の問題、相対的真理と絶対的真理の問題と関係があるとしている。エンゲルスは言う「人間の思考は至上的であるとともに、非至上的であり、またその認識能力は無制限であるとともに制限されている。素質、使命、可能性、歴史の終局目標から見れば、至上的で無制限であり、個々の実施とそのときどきの現実から見れば、非至上的で制限されている」（マルクス・エンゲルス全集二〇「反デューリング論」）

人間の限りある認識の能力と、無限に発展する客観世界との間には矛盾が存在する。人間は宇宙的な、究極的な絶対真理を即座につかむことは不可能である。しかしこのことは、物質の世界が不可知であるということと同じではない。一部の人は、目前のいまお不可知なる問題を弁証法的見方で取り扱うことをつかんでいたために、宗教がさしだす簡単な答えを受け入れてしまうことになる。

また、たとえば生命現象についての認識については、近代の科学的はひたすら生命の謎を解明しようと研究してきた。エンゲルスは『反デューリング論』のなかで、当時の科学に基づいて、生命とは物質的存在の最高のものの一つであることを明確に指摘している。生命蛋白の構成について、科学的な研究も絶えず進展している。一九六五年、我が国の科学者は人工的にニユウイトロンを合成し、一九八一年には酵母ビンアン酸から核糖核酸の合成に成功した。これらのこととはいざれも生命科学の上で大きな貢献をなしたものである。しかし今に至るまで人々は科学的手段で生命を作り出すことができず、生命の謎は、な

おひきづき研究に努めなくてはならない。

我が国が社会主義社会になつて以後、衛生保健の事業ははなはだ発展をとげ、中国人の平均寿命はとてもびた。しかし自然の定めによつて人はすべて死ぬものなのである。生死の問題は、人々の誰もが関心を持つ問題である。弁証法的生命觀では、生と死とは物質運動の形式で、両者は連係があるが、また別のものもあり、相互否定の対立的統一である。新陳代謝が絶えず進んでいるという意味からすれば、生とはつまり死を意味するものである。エンゲルスは言う「こうして生を考察する場合には、生のうちにいつでも萌芽として存在するところの生の必然的結果、すなわち死との関係がつねに考察されているのである。……これがいつたんわかつてしまつた人々には、靈魂の不滅についてのおしゃべりはすっかりかたづいてしまつたのである」（マルクス・エンゲルス全集二〇「自然の弁証法」）

しかし一般的に、人々は死の到来を願わないということからして、先に述べたような科学的生死觀を決して受け入れないし、一部の人は社会的、家庭的、感情的な様々な原因で、靈魂が死ぬことのない「彼岸」に行くという幻想で、生命の内在形式を死後に引き伸ばそうと執着し、自らの慰めを得、このようにして宗教に向かうのである。ある仕事でそこぶる成功した知識分子は、愛妻を失った苦しみで、孤独にたえかねて、牧師に靈魂不死の教義を尋ねに出かけている。

またどのように人生の境遇を考えるかというのも、人々が常に遭遇する問題である。社会主義制度は優れており、人々も皆自分の前途を見据え、幸福が実現するようとの願望を抱いている。しかし現実には社会の中では誰もが常に人生の道筋においては、予見できない境遇——健康、進学、結婚、事業などの部分での様々な事態から、生死離別、悲歡離合などを含めて——が起こっている。人々は巧くいっているときは往往にして深い研究をしないが、逆境のもたらす苦難に対しても常に精神的なさいなみを受けて、心が迷ってしまう。社会主義社会の中の個人も、失恋、配偶者の死、進学の失敗、就職の失敗などなどによる挫折と、そのショックによる痛手の経験も数多く存在している。このような状況を作り出すのは社会的な原因のほかに偶然なる要素もある。このことに、ある人は捉えがたいものと感じて、そこで宗教がいう宿命論的信仰の中に答えを求めるのである。

人生の中では、ある種の経験、たとえば生老病死は必然的法則であるが、しかしある事件がいつどのような状況で起こるかということは偶然性のものがある。実際に生命の過程は、それ自身、複雑な因果関係をもち、必然性の部分を持つが、また偶

然性の部分をもち、ある種の非本質的、外在的な原因も、また物事の発展の過程において偶然なる現象の発生を導く。人々が宿命思想から脱却するには、必然性と偶然性の対立の統一の関係を理解しなくてはならない。もしからゆる境遇がすべて必然的なものであるとか、偶然なものであるとかと見なしたら、たちまち宗教の観念を導入してくることになる。

レーニンは人の認識が一直線ではなく、かぎりなく円にちかく、螺旋の曲線にちかいと語ったとき「この曲線のどの断片、破片、一片も独立の、まったくの直線に転化する（一面的に転化する）ことができる。その場合には、この直線は（木を見て森を見ないならば）泥沼に、坊主主義に導いていく」と述べている（レーニン全集三八「弁証法の問題について」）。

先に述べた宇宙や生命、人生などの問題に関して、宗教には従来から一定の解釈があり、それらは、ずっと今日の社会主義の時代にまで伝わっている。これらの解釈に共通する特長は、可知と不可知の対立、必然性と偶然性の対立、相対的真理と絶対的真理の対立、人の目的性を、事物の無目的性に置き換える点である。この種の直線的な思惟方法の結果は、当然ながら唯心主義と形而上学の範疇のものとなる。

見て取るべきは、唯心主義的、形而上学的、直線的な思考方法は、人類の認識の過程において簡単に生み出された偏見や過ちなのである。人々が日常生活や仕事において、たえず引き起こす、主觀的、一面的な思想表現はすべて同じものを根源としている。マルクス主義の観点からすれば、真理と誤りとの間には越えることのできない限界などはなく、正しくレーニンが言うように「あちこちと一步をふみだしても、結局のところはひとつの方へ一步を踏みだすのとおなじことであり、真理はたまち錯誤となってしまう」（レーニン選集四）のである。

彼はまた宗教の唯心主義を「実を結ばぬ花」とした。这一点がわかれば、人が認識の上での誤りによつて宗教を信仰することを明らかにでき、かつこのことは決して理解できない現象ではないことが分かるのである。当然ながら誤った認識を持つ人が必ず宗教徒であるということでは決してないが、ここには様々な不可知の現象と境遇に対するすべての弁証的態度の問題がある。人々が一旦科学的弁証的な世界観を持てば、世界には様々な不可知の物事は依然として存在するが、しかし宗教的観念を産み出すことはないであろう。

二、感情の求め

宗教の心理において、人間の感情という要素は非常に重要である。ホイエルバッハは『キリスト教の本質』『宗教の本質』

などの著作の中で「感情は宗教の基本的な道具である」「神の本質は感情をでるものではない」（ホイエルバッハ著作選集、下巻）といつてゐる。

感情の発生と要求は互いに密接に関連している。人間は自分自身の生存と発展を維持しようとするために、外界の環境のいくつかの条件にたいして要求が産み出される。外界の事物と人間の要求に關係があるときに、はじめてそれに対応する活動が引き起こされる。もしもとめて満足が得られると、人は心地良い気持ちになるし、求めても得られないと、人を様々に不愉快な気持ちにさせる。社会主義の時代においては、人の心理的活動の内容に特殊性があるとしても、しかしその過程は逆に共通性も持つてゐる。

人は高等な生物であり、その需要は多方面にわかつたつており、基本的なもの、生存に必要な衣食住、仕事、性などの生理的な要求のほかに、さらに高級な、精神的な要求がある。一般的に言うなら、人はまず先に基本的な物質生活があつて、はじめて生存を維持できる。しかし、衣食があるからといって生活に満足しているわけではないので、だから社会主義の物質文明を建設すると同時に、精神文明の建設を強化しなくてはならないのである。社会の精神生活が豊富で多様になつて、はじめて各階層の人々の要求を満足させうるのである。

マルクスは言う「宗教はなやめる者のため息であり、心なき世界の心情である」（マルクス・エンゲルス全集一「ヘーゲル法哲学批判」）。エンゲルスもまた物質的解放感に絶望した人が「精神的な解放を求め」「思想的な慰めを求め」ことに言及している。これらの論述は、いずれも宗教徒の宗教信仰をさしておらず、現実の生活において、苦難や圧迫を感じた時、精神的・感情的な様々な要求を満足させようとしたものである。宗教の意識は現実から駆け離れた「幻想」である。それは一般に「理想」とされるような積極的な幻想ではなく、「空想」という消極的な幻想である。しかし消極的な幻想がおこるのは、個人の願望の支配があるからである。エンゲルスはその発生の過程を描き出して、宗教は「その本質から言えば、人間と自然からあらゆる内容を抜きとつて、その内容を彼岸の神という現像にうつすことであつて、ついでこの神が自分のありあまつていもとの一部を恵みふかくも、ふたたび人間と自然にゆずるのである」（マルクス・エンゲルス全集一「イギリスの状態」「カーライル『過去と現在』」）とした。まさしく人間の願望が現実のなかでは満足しようがないために、幻想の中に迂回するやり方で、彼岸の神から一部の内容を取り戻すことになるのである。

社会主義社会においても、依然として社会生活のなかで発生する矛盾、人生の過程での不遇、個人の精神的肉体的状況などの原因によって、心理の上で宗教を求める心が生まれる。主たる反映は以下の方面となる。

一、精神の上の支えを求める

人々が現実の生活の中で充実感をなくし、幸福への願いが実現する保証がなくて焦ったとき、精神上、超自然の神の力に頼るようになる。かつてホイエルバッハはこの種の心理を描き出して言つた。「宗教の前提とは、意志と能力、願望と獲得、目的と結果、現象と実際、思想と存在の間の、対立あるいは矛盾である」と。（ホイエルバッハ哲学著作選続、下巻）彼は「人の依頼の感情が宗教の基礎である」と考えた（同右）。各種の宗教の祭祀や祈禱の儀式はすべて人間が神にたいして依頼し、お告げを求める現われである。

私達は調査の中で、今日幾許かの人々は、もいかわらず自分の運命を把握できず、そのために神仏を礼拝していることを發見した。たとえば数年前の、進学や就職が困難なある種の状況のもとで、ある寺や廟の香炉の中に書き付けがあり、上に「大学に受かりますように」「就職試験の成績がよく、選択の自由がありますように」などの文句が書いてあつた。ある教会でも、人は似たような内容を書いた紙を供え箱に投げ込んでいた。

生活の中で遭遇する挫折やショックにより人々は、もつと簡単に依頼の感情を持つてしまう。たとえばある農村の青年は小さいときに母をなくし、同級の女性と八年間恋愛したが、結局、女性の両親が彼女を都会に嫁がせて失恋してしまつた。苦しみの経験は、彼を失意のどん底におとし、「青春はわが心中で終わつた」と考えて、最後には出家して僧になつてしまつた。依頼の心を持つ人は、目標が実現していない状況にあつては、それ以外の部分での満足をもつて、この種の心を維持継続している。たとえば、病気のために信仰するという現象は、いくつかの、地区での医者はおらず薬もなく、人々の経済的な生活が相対的に貧窮な社会という以外に、病人の心理的な負担が深刻だという原因がある。調査によれば病気のために信仰したという人々の大多数は、慢性的な病気、あるいは絶望的な病気の患者で、前者は心の焦り、病魔のまわりからの脱却を渴望し、後者は絶望的な状態にあって、往々にして一縷の希望を信仰に託すのである。依頼の心によつて、ときには精神の治療の働きを起こし、自身の感覚が好転し、しかも心の慰めがあるときには患者の痛みにたえる能力を強からしめることもできる。このように病気のために信仰する人々は、常に「病気が好転したら神に感謝し、病気が進んだら死んで天国に行く。死ぬも生

きるもすべて神の思し召し」と言う。

たとえある種の目標が達成されたとしても、なお運命を掌握できないことを気にしている人々がおり、彼らは宗教に心のより所をもとめることがある。たとえば舟山地区の家庭環境が余りよくない漁民の女性は、過去には貧乏の故に信仰したもの、お香を捧げる力さえなく、菩薩にたいして恥ずかしさを感じていた。現在ではお金もあり、しばしば張り切って仏事を行なっている。岱山県のある村の一百戸への抽出調査によると、一九八三年、各人の年平均収入が三百元以上の比較的裕福な家庭のうち、仏を信じ、礼拝する人数は三三、九パーセントであり、年の平均収入が百五十元以下の比較的生活が困難な家庭のうちでは一九、四パーセントであった。豊かな漁民が依然として信仰する原因は、彼らが、豊かなのは第一に党の政策によるもの、第二に神の御加護によるものと考えてゐるからである。一面では神にその恩を感謝し、一面ではもし神の加護がなかつたら豊かさも再び失せてしまうと悩んでいるのである。都市と農村で一連の改革処置を行なったとき、一部の個体戸の農民、小さな手工業者、小さな商売人は大金をもうけた後も熱心に宗教を信仰したが、これは自由な経済は、彼らに豊かになる機会を与えたが、またかなりの危険があつたからである。ある人は運命の捉えがたいことを感じている。上海のあるソファ作りを商売とする青年は、常づね焼香礼仏をし、気持ちよく寄付をしている。そのわけを聞かれると、彼は「私は菩薩が、毎年の蓄財商売繁盛すべてのことが思いのまま、政策が変わらないよう加護してくれることを希望している」といった。

二、人々との交流の満足を求める

人は孤立した個人としては存在せず、常に社会の中で他人との交流関係をもつてゐる。マルクスはいう、「その時代時代の諸関係を創造し、日々あらたに創造しているのは、まさに個人個人の人格的個人的なふるまい、相互にたいする彼らの個人としてのふるまいにほかならなかつた」（マルクス・エンゲルス全集三「ライプツィヒ会議、Ⅲ聖マックス」）。社会には、共通の信念、社会規範、道徳観念の人々が作る小さなグループがあり、往々にしてグループの参加者に感情と社交の上の満足を得させるものであるが、宗教もまたこのような一種のグループであり、人が宗教を信仰することとグループの吸引力とは一定の関係があるのである。

グループは結束の力をもち、構成員に共に集まることを楽しみにさせ、時には自発的組織的行動を取らせる。仏教の組織は比較的緩やかで、焼香礼仏は教徒の個人的行動だが、ただし毎年の時期になると、名山大刹はしばしば各地からのグルー

プでの焼香の人を見る事ができる。このような時に応じての組織は、それぞれ熱心な教徒がリードし、参加者の多くは年老いた女性である。彼らは長い道のりもものとせず、グループの中ではお互いに助け合い、十分に宗教グループの共通の心理を表している。

天主教やキリスト教などの組織性の強い宗教の中では、共通する心理的な特長は一層明白である。同じ宗教信仰に所属していることを知ただけで、人々は特別な親近感をもつてしまう。

いずれの宗教も教徒の集団での信仰を重んじており、例えば天主教のミサ、キリスト教の礼拝、仏教の法会道教の道場、イスラム教の礼拝や聖地巡礼などである。信仰においては、宗教のもつ一定の建築、儀式、音楽などがいずれも宗教的感情を激しく呼び起こしている。さらに重要なことは、教徒たちが特定の宗教の内容に共同して心を集中することで、彼らの宗教的な情緒は互いに感染することである。宗教的感情は個人と集団を共に結び付け、彼らの信仰はさらに堅さを増すのである。

宗教の集団のなかにおいては、人々の信仰に対する考え方、人生の価値観などすべてが比較的速やかに伝わることができ、ある種の集団的な心理を形づくり、個人の行動にたいして、指導的、かつ拘束的な効果をなしている。

たとえば熱心な教徒の模範的な行動は、一般教徒に大きな働きかけを果たす。個々の教徒の信仰が揺れ動いたときに、他の構成員はしばしば忠告してその信仰を堅くさせる。かりに宗教的な行為が困難になつたりしたときには、集団の構成員は共同の信仰を守るために一致した行動を取る。これも「文化大革命」の期間中、宗教徒が迫害にあつたりした後、そのほかの教徒の信仰がさらに堅いものとなつた原因の一つである。

まさしく宗教集団におけるこのような社会的な働きが、非教徒にこの種の集団における交流に対する羨望の心を起こさせ、入信されることとなる。上海のある若い女性は、慢性的な病気になつてからは、同級生、友人、ついには恋人までもが、彼女のもとから去っていき、兄弟たちも彼女を「ただ飯喰い」と嫌い、冷たい言葉を投げ掛け、彼女をとても苦しめたが、後に彼女は何人かの教徒から同情と関心をよせられた。彼女は「私が病気になつたとき、どの兄弟も氣にもとめてくれず、教会の兄弟姉妹たちだけが、物質的・精神的援助をしてくれた」と述べ、入信してしまった。

大多数の人の信仰が同じ宗教である民族においては、宗教集団のもつ心理的な特長はさらに明白で、各々の民族は、自分の民族の特長を維持しようとするところから出発して、宗教問題にたいしては往々にして敏感に反応して干渉を許さないものが

ある。

三、道徳的制約を求める。

道徳とは人々が社会の中で行動するうえでの規範であり、また個人的には一種の内在する情感であり、意識であり、品性である。人は社会生活の中で、常に自分の行動について、道徳的な評価と選択を行なって、信念の拘束力によつて自己の行動を選んでいく。良心は人々の道徳的な生活のなかで重要な意義をもつてゐる。意識として言うなら、それは階級的な内容をも含んだ階級性をもつてゐる。感情として言うなら、それは自我の抑制と自己内在的な制悪の働きをもつてゐる。それは自己の社会的な責任を意識させ、人が正しいと考へた行為を選択をしたときに、自身に満足を感じさせ、誤った行為の選択をしたときに自己を責めるものなのである。一部の人は自制の能力にかけ、誤った行為をなした後に疚しさを感じ、しかもそこから抜け出しができずに苦悩し、たちまちのうちに宗教の救いを求めることになる。

宗教道徳がその教徒たちにたいして拘束力をもちうるのは、教徒たちが、宗教の教義と原理はすべて背いてはならず、背けば神の罰をうけ、たとえ現世で罰をうけなくとも、来世には必ず惡の報いがあつて酷刑をうけると考えてゐるからである。教徒はまた、宗教信仰が、彼らの道徳的修養において、善に向かう意志を増強させ、非道徳的なものに向かう障害を克服させるものと考えてゐる。

調査の最中、我々は十年の動乱のさ中、無政府主義の思想が氾濫したために、社会の道徳の気風が一気に凋落し、少数の青年はよくない習慣に染まり、甚だしいのは、ゴロツキの仲間になつたものさえたことを発見した。彼らの中のあるものは、両親を殴り罵り、あるものは盜み略奪し、人々の信用を失つて、内心ではとても苦しんだのである。のちあるものは宗教を信じ、「帰依」（あるいは「改心」「悔改」という）という心理過程を通して、道徳的な、自己抑制の目的に到達したのである。社会の中に不正の風が出現した際に、それを正そうとする青年は仲間と共に汚れることに甘んぜず、ある人は宗教の中に、宗教道徳の原則と規範を追及し、「宗教信仰によつて自己を守ろう」としたのである。

第四節 宗教が長きに存在するのは多くの原因が相互に作用しあつた結果である

以上、宗教的伝統の影響、現段階において宗教が存在する社会的条件と、人間の心理的要因の、三方面から社会主義時期に

おける人々の宗教信仰の原因について論じた。これらの原因は社会主義時期にあっても長くはらくであろう。

我が国において宗教が伝統的にもつ影響の起源は古く、とくに、民族の文化や習俗と結びついた部分は、長きにわたって続いてきた。対外開放の政策が貫徹されている過程において、海外の宗教の影響は強まることは避けえないものがある。ただし一般的にいうなら、それらはただ宗教の情報を伝えるだけであり、人に宗教のもつ媒介のはたらきを知らしめるだけである。人が宗教信仰を起こす原因是二つの方面に帰納できる、即ち、客観的な社会的原因と主観的な心理的原因である。

宗教信仰が発生する過程は、とりもなおさず主観客観の要因が、人という統一体に相互に作用する結果であり、両者は相互に依存し、一方が欠けてもだめである。中でも、客観的な社会的存在が決定的な作用となる。しかし、同じような社会条件の下でも、個人的心理的条件がなければ、人間は宗教信仰に走らない。同じように、正確に自然を認識できず社会的な矛盾を抱える人々の中であっても、もし社会の宗教の影響がなかつたら、人は宗教信仰に走ることはない。社会的原因と心理的原因が依然として存在することで、はじめて宗教は長期にわたって存在できるのである。

現実の社会の中では、人々の認識の水準と感情の求め方が画一であることは不可能であり、多くのレベルにあることは長期的な現象であり、だから宗教の心理的原因も同じように長期性をもつのである。

認識の差という面から論じるならば、現在の段階では、我が国の十億の人口のうち、先進的、科学的な世界観をもつ人は少數に過ぎない。人の認識活動もまた極めて複雑であり、色々な思想が同一人の頭脳の中に併存し、常に互いが排斥しあい、また互いに影響しあいつつ、統一への過程を進んでいる。甚だしい場合、指導的人物達の行動にも、時として意識の多元的なる現象が現われ、ある問題に対処するときは唯物主義の観点を採用できたのに、別の問題では唯心主義の観点を採用してしまつたこともある。三十年前、周恩来は、共産党員で政治の上でも、思想の上でも、社会主義の経済制度の要求に適応しているのに、晚になると鬼を怖がつてしまふ人がいると述べたことがある。このような現象は、今後長きにわたって、おそらくはまた免れえないものである。ある自然科学者は、科学研究の最中には、徹底して唯物的、科学的方法を推し進めたが、しかし世界観の上では唯心的観点をもち、ついに宗教を信じるに至った。

人々の感情の要求ということでは、ふだんから各々異なっている。異なった人生観は、人々が生活のなかの順境や逆境、苦楽に対処する時の異なった態度を決定する。共産主義的人生観を打ち立てた人なら、積極的態度で困難を克服できるが、ある

人は必ずしも高度な思想のレベルでなく、かといって幻想の幸福を追及するわけでもなく、そのために宗教信仰の心をもつこともしないでいる。ただし総じて一部の人は、複雑な社会条件および、種々なる認識の原因のゆえに、感情の上でバランスをもとめて、宗教信仰に走ることになる。これらの人々の中では、年令、性別、個性などのちがいが、また異なったレベルでの宗教の要求について、異なった心理的特長を形づくっている。

心理的な要素の長期性を強調したが、しかし宗教が人類の永久なる本能であるとの結論をだすことは決してできない。なぜなら個人の信仰についていうなら、心理的な原因是重要ではあるが、人の本質とは社会的な関係の総和であり、人の個性は、個人の生理的な素質と関係するといつても、それは環境と教育の影響の下で形成されるものだからである。つまりところ、それは社会性によって決定されるものである。

マルクスとエンゲルスは指摘する。「意識が生活を規定するのではなくて、生活が意識を規定する」。この種の観察方法の前提は人間である。「なんらかの空想的な完結性と固定化における人間たちではなくて、特定の諸条件のもとでの現実的な、この目で見うる発展過程のうちにあらざる人間たちである」（マルクス・エンゲルス全集三「フオイエルバッハ、序論」）である。人が客觀世界に対し、異なった認識、異なる要求を起こして、宗教的認識と幻想にいたるのは、彼の生活が、一定の社会的条件の下で、異なった社会的地位、家庭環境、教育程度、実践経験などなどの総合的結果を有するからである。人の社会性が階級社会のなかで主として写しだすのは階級性であるが、階級が消滅した後でも、宗教発生の多方面にわたる社会的原因は依然として存在する。社会主義社会にあっても、人は自分の運命を完全に掌握できないと感じて神に対する依頼感をもつたり、孤独を感じて宗教の中に集団の交流を求めたり、社会の風潮に不満をもって宗教道德を追及したりすることがありうる。これらの心理的要因も、實際は、客觀的社会の人の主觀的意識への反映である。

本章の第二節で提起した社会的な原因のあるものは正しく変化の中にある。経済体制の改革とともになつて我が国の生産力は加速度的に発展し、一部の地区の相対的な貧困も正しく改善されつつある。物質文明の建設と同時に精神文明の建設にも注意をはらい、人々の社会主義の覚悟を高からしめ、一部の社会的弊害と不正の風潮を克服し、最終的には人と人のあいだの相互の関係を改善しなくてはならない。社会主義建設の過程における全面的な誤りと挫折はすでに正された。ただし我々はまた我が国のような人口が多く經濟的に遅れた国家を、近代的、高度の文明、高度の民主主義の中国的特色をもつ社会主義国家とす

ることが、正しく長期的かつ巨大な任務であることを必ず十分に考ておかなくてはならない。人々の物質的生活、文化的水準のレベルアップには、困難な努力を必要とする。社会主义的法則を正確に掌握するには、さらに多方面の検討をなさなくてはならない。この過程においては消極的な要素が再び現われる可能性があり、一部には失敗や誤りが再び発生する可能性もある。社会主义社会の中でも各種の社会的矛盾が存在するかぎり、宗教の社会的な土壤は常に存在するのである。

宗教は社会主义社会の中に長きにわたって存在するが、本章において提起した各種の宗教信仰の原因の関係は極めて複雑である。

それらは孤立的に、単独で、平面的に存在するのではなく、互いに關係をもち、互いに浸透しあい、異なった広さと深さで互いに作用しあっている。まさしくレーニンがいつたように「因果関係の運動」＝実際には…それ自身の内的關係において、或る一定程度の広さと深さ……までとられられ、わがものとされた物質の運動、したがつて歴史の運動」（レーニン全集三八『ヘーゲル（論理学）』の摘要）となる。多くの信仰の原因のうち、簡単には足したり引いたりできないにしても、一つの原因を減少させると、宗教発生の機会が少なくなるようみえるが、実際の状況は全くそうではない。階級の根源が消失した後は、いかなる人も、階級の抑圧によつて苦しみを起こして信仰に逃げこむことはないのだが、しかし社会の矛盾が起こす困難によつて宗教を信仰する可能性はあるし、ある人は社会の矛盾を感じることはなくとも、病気にさいなまれて神仏をいのることもある。個別の人についていうなら、信仰の原因は具体的には各々異なつてゐるが、しかし彼らにとつて困難は同じように現実の存在なのである。人々は生活が苦しいときには豊かな収入の希望を神に託したが、しかし彼らの生活が改善されてからも、認識の上で自分の運命が掌握できることで、以前のように神に頼るであろう。宗教を信仰する民族や家庭にうまれた青年がうける伝統的な宗教の影響はきわめて深く、それ以外の要素によつては必ずしも敬虔に宗教を信じるわけではないが、かえつてまつたく伝統的な宗教の影響のない青年が、逆に心理的要素が主たる動きとなつて、宗教の中に、思想の出口を求める可能性がある。人の認識や要求などの心理は、客観的な物質的条件の制約を反映しており、思想や意識は物質的社會的存在とともになつて発生変化するが、しかしその過程は緩慢としたものである。宗教が存在のよりどころとする社會的要因は次第に減少しているが、人の宗教的觀念がかなり長い時間持続的に存在することは考えうる。

況については、各人の間にとても大きな隔たりがあると共に、一定の偶然性もある、ただし全体的にいうなら、宗教が存在のよりどころとする社会的原因と心理的原因、およびそれらの原因の相互の間のはたらきの関係は、逆に長期的であり、現段階ではたらきには必然性がある。我が国の現段階における生産力の発展水準、生産関係の変革の程度、さらに科学文化の普及およびレベルアップなどの基本的な状況から見れば、我が国に宗教が長きにわたって存在するのには必然性があり、歴史の発展の法則に叶っている。もしこの客観的法則を尊重しなければ、あたかも十年の動乱の最中、どのように強行的に宗教をやめさせ、宗教はとっくに消滅したというニセの現象をでっち上げたように、自分をだまし、他人をだまし、ちょうど正反対の社会的結果をうみだすことになる。

宗教が長きにわって存在する原因を十分に観察した後には、同時に社会主義社会の内部において存在する、宗教にとって不利なるもの、およびその発展を制約するものという客観的条件についても見なくてはならない。

一面からすれば、宗教は一種の唯心主義的世界観であり、その本質的な内容は人々が正確に世界を認識し、世界を改造する道具となりえないことを決定づけており、したがって宗教は社会主義社会において発展するのに自身の制限をうけざるを得ないことになる。

別の一面では、我が国社会主義の建設は正しく大いなる前進を踏み出し、人々の物質生活は向上し、精神的需要は多くの方面で満足され、文化的科学的知識は普及し、歴史的唯物主義と、弁証的唯物主義の理論は伝播し、それらはすべて宗教が存在する社会的な基礎を弱め、またさらに多くの人々が、正しい世界観と人生観を確立して宗教から抜け出ることを助けている。我が国五十年代の各宗教は、いずれも信徒の数が下降線をたどったが、主要なることは社会の大きな変化と発展の完成が、信徒達に現実の社会に対して満足を覚えさせ、宗教信仰に冷淡ならしめたことである。ここ数年、一部の地方ではある宗教が発展しているが、重要な原因は十年の動乱が、経済の大きな損失と人々の思想的な混乱を招いたことである。国家の経済建設の発展にともなって、政治生活は正常となり、社会は安定団結し、一部の地区の、宗教の発展が比較的速やかであった現象は、自然のうちにゆっくりと下降している。我が国の歴史的伝統と、現在の国情から見れば、ある時期、ある地域における宗教の発展には起伏があろうが、しかし全体から見れば、すべて一定の限度があり、無制限に膨張するものではない。しかし宗教が長きにわたって存在し続けることもまた疑う余地はない。

あらゆる物事のすべてに発生、発展、消滅があるよう、宗教にも消滅がある。宗教が消滅する条件に関して、マルクスは『資本論』のなかで「およそ現実の世界の宗教的な反射は、実践的な日常生活の諸関係が人間にとつて相互間および対自然のいつでも透明な合理的関係をあらわすようになったときに、はじめて消滅しうるのである」（マルクス・エンゲルス全集二三）と言っている。エンゲルスは『反デューリング論』の中で「人間がもはや事を計画するだけでなく、事の成否をも決するようになるとき、そのときにはじめていまなお宗教に反映されている最後の外的な力が消滅し、それとともに宗教的反映そのものも消滅する（それは、そのときにはもう反映するべきものがなにもないという簡単な理由によるのである）」（マルクス・エンゲルス全集一〇）。このことはいくつかの世代の人々の努力を通して、人類が完全にいかなる貧困、迷蒙、精神の虚脱の状態からも抜け出て、物質文明と精神文明が高度に発展した一個の社会を建設し、人々の誰もが、十分に科学的态度をもつて世界に対応し、人生に対応し、もはや再び虚幻の神の世界に寄る辺を求めようとはしなくなつたとき、現実の世界の各種の宗教は初めて最終的に消滅するのである。

周恩来は早くも一九五一年に、宗教は社会主義の時代になつても、消滅できないとはつきりと指摘している。当時ある人は天主教徒に土地を分配すれば、信仰しなくなると考えたが、周恩来は「言うまでもなく土地を分けられた農民、彼らは社会主義社会になつても、依然として信仰している」と述べている。（『周恩来統一戦線文選』）彼はまた「宗教を信仰している人は、現在の社会主義社会の国家のうちにあるだけではない。将来の共産主義社会になつても、完全になくなるのであろうか。今はまだそんな死を語ることはできない」（同上）これは宗教が長きにわたつて存在することについて述べたものであり、前者はすでに事実が証明し、後者は我々がよくよく考えるべきことに値しよう。

〈訳者補注〉 本論文「その三」（本紀要第五〇号、平成四年三月）において扱つた、中国イスラム教をめぐる論述は、訳者の知識不足の故に十分な訳出ができず、保留としたものが少なくなかつた。しかるに最近になって Academic Series NEW ASIA の一環として『中国少数民族の信仰と習俗』上下二巻（覃光広等編著、王汝瀾・林雅子訳、伊藤清司監訳、第一書房、平成五年三月）、さらに『殉教の中国イスラム神秘主義教団ジャフリーヤの歴史』（張承志著、梅村坦編訳、亜紀書房、平成五年一〇月）が相次いで刊行された。中国のイスラム教の歴史を扱つたものとしては、つとに『中国回教史』（傳統先著）、などがあつたが、現代に及ぶ回教史となると、中国人自身による中国語の研究書

をのぞけば、必ずしも多いとは言えないし、あつたにしても入手しづらいのが実情と言えよう。その意味でもこの二書の刊行は、中国イスラム教の歴史と現状を知るうえで格好のテキストと言えよう。全体について述べることはできないが、本訳文と関係する各派の関係だけでも記しておく必要があろう。

中国イスラム教がスンニ派であることは周知のことであるが、同派は、ハナフィー派（派祖アブーハニーファ六九九—七六九）、シャフイー派（派祖ムハンマド・ブン・イドリース・シャーフィイ七一五—七九五）、マーリク派（派祖マーリク七一五—七九五）、ハンバル派（派祖アフマド・ブン・ハンバル七八〇—八五五）の四大法学派に分派したという（『信仰と習俗』上巻、一二三二頁）。このうち中国の回族に広まつたのは、ハナフィー派を直接の起源としたカディーム（格底木（目））派であるが、のちに甘肅、寧夏、青海の回族の間には、教義や法の解釈を巡つてあらたな教派が生まれた。それがカーディーリー（嘎地林耶）派、クブラウイー（庫布（ト）林耶）派、フフィーヤ（胡（虎）夫耶）派、馬明心（？—一七八一）によるジャフリーヤ（哲合林耶）派であり、さらに馬万福によるイフワニー（伊合瓦尼）派であるという。このうち清朝末期民国初期にあらわれたイフワニー派は「新教」と呼ばれ、それ以外の諸派は「旧教」と呼ばれたという。旧教の四派は「門宦制度」を確立して、世襲されたアホム（聖職者）が自分の教区の大土地を所有し、かつ教徒を管理するという祭政一致の立場にたつて、信者間において絶大な権力を持つたという。

なお新疆にはカシュガルを中心にして、イーシャン（依禪）派がある。この派は八世紀頃にアラビアにおいて派生したといわれ、今日、中東やインド、パキスタン、アフガニスタン、ウズベクスタンなどにあるという。同派は宗教上の指導者である「イーシャン」を擁して門宦制度に似た社会構造を作り上げていたという。かれらもジャフリーヤ派とおなじように神秘主義の色彩の強い宗風であるという。